

## はしがき

環境問題をめぐる中国および日本の状況は大きく変化している。

まず中国。2008年の北京オリンピックおよび2010年の上海万博の開催成功を経て、中国政府と中国国民の両方が自信をつけた。国際通貨基金（IMF）の副専務理事を中国人が務めることになり、政治でも経済でも、国際社会において確実にスーパー・パワーになりつつある。

環境問題、例えば地球温暖化問題に関しても、それが十分であるかどうかは別にして、温室効果ガスの排出抑制に関する数値目標を国際社会に対して提出している。北京大学には、「低炭素」という言葉を冠した温暖化問題の研究所があり、環境問題の研究者や民間非営利組織（NGO）の数も激増している。大規模な書店では、環境問題の本が数多く積まれており、多くの若い学生が環境やエネルギー関連のベンチャー企業に就職している。

日本では想像できないくらい厳しい環境規制も導入されている。例えば、昨年、第11次5カ年計画の中にある省エネ目標を達成するために、各地で強制停電が発生し、大きな社会問題となった。北京では、自動車は毎月の抽選で当たった人のみが購入でき、その当選確率は約50分の1だと言われている。

さらに、中国の対外的な経済活動が国外に及ぼしている環境負荷に対する認識にも、変化がみられる。数年前まではごく少数の国外訪問経験者を除き、そうしたことへの問題意識はほとんどなかった。それが、最新の民間版環境白書こと『環境緑書』では、中国の環境面での対外的な加害について、まとまった分量を割いて、中国社会に問題提起するまでになっている。

一方の日本。2011年7月現在、8月まで延長された国会で温暖化対策基本法案が審議される見通しはなく、排出量取引などの実質的な温暖化政

策は導入されていない。2020年に1990年比で25%削減という温室効果ガスの数値目標の維持に対しては、2011年3月に起きた福島原発事後、産業界からの反発がより強くなっている。原発事故で放射性物質の大気への飛散を防げず、さらに大量の汚染水を海に流した日本は、国境のない地球環境——もちろん、そこには中国の環境も含まれる——に対しての明白な加害者となってしまった。

ただし、これらは日本と中国の立場が逆転したという単純な話ではない。状況や問題、そして社会各層の対応がより錯綜し、より普遍化したというのが、より正確な理解だと考えられる。

私たちが最初の中国環境ハンドブックを書いた時、中国の環境問題は、ある意味では、私たちが理解できる「公害問題」の発展形であった。非常に大雑把に言えば、多くの中国人は被害者であり、悪いのは政府や大企業であった。

しかし、例えば中国政府は、現在、温暖化対策あるいは省エネや各種汚染物質排出削減の対策のため、国の目標を各産業、各地域、各企業に振り分けている。その振り分け方をめぐって、豊かな上海や北京と、貧しい貴州省や山西省とが対立している。まさに途上国対先進国という普遍的な対立が、中国国内で再現されている。汚染工場が、どんどん奥地に入って行って見えなくなるのも、かつて先進国がエネルギー多消費・高汚染産業を途上国へ移転したのと同じ構図である。一部は実際に、中国から、より経済発展水準の低い途上国へと移転してもいる。

変わらない中国もある。その典型が2011年7月に温州市で起きた高速鉄道の事故への初期対応だ。事故発生後、すぐに事故車両を地中に埋めてしまったという行動は、国際社会に対して事故そのものよりも大きな衝撃を与えた。このような国が、今後10年間、原発を約2カ月に一基以上のペースで建設し続けていく計画を持っている。何か起きたら、と考えるだけでもぞっとするというのが福島原発事故後の今の日本人の普通感覚だろう。ただ、高速鉄道の事故に対しては、国際社会以前に国内世論が激しく反発し、中国政府もすぐさま対応の再考を迫られた。ここに一縷の希望を見出すのは早計かもしれないものの、少なくとも中国人

の市民感覚は確実に変わりつつある。

ともあれ、このように世界も中国も、そして日本もダイナミックに動いている状況下で、私たちが考え続けなければならないもの、見失ってはならないものは何だろう。

それは環境問題の本質ともいえる「最も大きな害を被るのは、最も社会的に弱い者」という事実だと私たちは考える。今こそ、国という枠を超えて、被害者、あるいは潜在的に被害者になりうる立場にある多くの人々が意識を共有し、環境問題を考え、連帯することによって、少しでも解決に向け状況を改善していく必要があるのではないか。

もちろん、簡単ではない。それでも、なんとか前に進もうとするのが人間のはずである。「どんなに悲劇的な状況でも、状況を変えようと頑張っている人が奇跡的に存在する」というのは水俣病に長く関わった原田正純さんの言葉だ。わたしたちも、中国の環境問題に関わり続けることで「奇跡」を見つけたり、「奇跡」を起こしたりすることに、少しでも貢献できればと思う。

中国環境問題研究会

明日香壽川 片岡直樹 大塚健司 相川泰